

くら　ち　たく　うしろ
藏地宅後古墳

津摩地区自然災害防止工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2008年 3月

島根県 浜田市教育委員会



藏地宅後古墳 調査前



藏地宅後古墳 調査後



石室内出土遺物（須恵器・鉄刀）



石室内出土台付椀と杯



横穴式石室（奥壁側より）



石室奥壁



横穴式石室 側壁掘形



周溝調査状況

序

浜田市教育委員会では津摩地区自然災害防止工事に伴い、平成18年度に浜田市津摩町の蔵地宅後古墳の発掘調査を実施しました。

浜田市周布地区では石見中央部で最大の前方後円墳である国指定史跡周布古墳などの遺跡が所在し、当教育委員会ではこれらの文化財の解明を行うために周布古墳周辺の確認調査、周布平野での試掘調査を実施し、いずれも貴重な調査結果を得ています。

今から約1,400年前の古墳の形・大きさ・石室の規模を明らかにし、出土した須恵器の中には珍しい明確な突帯をつける台付椀と杯がありました。これはあまり類例のないもので、他地域との交流の中で創られた浜田市周布地区の古墳時代の様相を示す資料となりました。

本書はこれらの調査結果と浜田市の遺跡を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習などひろく活用するための基礎資料としてまとめたものです。この資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、地域史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた島根県教育委員会及び関係諸機関に深く感謝申し上げます。また、あらゆる面から調査にご協力いただきました地元の方々に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成20年 3月

浜田市教育委員会

教育長 山 田 洋 夫

例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が浜田市建設整備課の協力を受けて実施した藏地宅後古墳発掘調査の報告書である。平成18年度に現地調査、平成19年度に遺物整理と報告書作成を実施した。

2. 調査は以下の組織で行った。

　調査主体　浜田市教育委員会教育長　山田洋夫

　調査指導　島根県教育委員会　文化財課

　調査員　柳原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）

　事務局　浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係

　　文化振興課長　山根　稔

　　文化財係長　原　裕司

　　主任主事　瀧山恵子

　　主事　近重智美（平成18年度）

　　主事　宮脇　聖（平成19年度）

3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

　調査協力　桑原善介、桑田龍三、桑原韶一、大谷晃二、東森　晋、守岡正司

　調査参加　佐々木五郎、坪倉ひとみ、中田貴子、中田洋子、吉賀久雄

4. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。

5. 本書の執筆編集は柳原が行った。

本　文　目　次

第1章	調査に至る経緯と経過.....	1
第2章	位置と歴史的環境.....	1
第3章	調査の概要.....	7
第1節	古墳の概要	7
第2節	遺構	7
第3節	遺物	15
第4章	総括.....	18
第1節	墳丘と横穴式石室について.....	18
第2節	遺物について.....	19
第3節	藏地宅後古墳と周布平野の後期古墳について.....	20

第1章 調査に至る経緯と経過

浜田市津摩町の蔵地宅後古墳は、現状で古墳の存在する丘陵斜面がかなり崩落しており、状況を確認するための確認調査を実施し、調査結果は既に報告している（浜田市教育委員会2008）。なお、遺跡台帳・遺跡地図では「蔵地繁正宅後古墳」となっているが、既報告で名称変更し「蔵地宅後古墳」としている。

その後、地元からの丘陵の安全確保について市建設整備課へ陳情があり、緊急に古墳の存在する丘陵を津摩地区自然災害防止工事として計画が進められることとなった。このため、市建設整備課の協力を得て、本発掘調査を平成18年11月6日～12月19日まで実施した。12月16日には現地説明会を開催し、約93名の参加があった。調査面積は16.93m²である。

第2章 位置と歴史的環境

浜田市は石見地方と呼ばれる島根県西部地域のほぼ中央に位置する。この地域は山々が海岸付近までせまっており、河川河口部には沖積平野が広がる。平成17年に旧金城町・旧三隅町・旧弥栄村・旧旭町と合併し、南は広島県まで接する広い範囲で新浜田市となった。

周布地区は旧浜田市の西部にあたり、国指定史跡 周布古墳などが所在する。古代から中世にかけての「那賀郡周布郷」にあたる。なお、「周布」の地名は兵庫県に「修布」、愛媛県に「周敷」がみられ、河流に沿った沖積層として共通するため、「スヘ（洲辺）」で砂地のことをいった可能性がある。二級河川の周布川によって形成された石見地域では比較的大きな平野とその北東側に発達した砂丘地からなる。現在、旧石器時代の遺跡は知られていない。

縄文時代

日脚遺跡で早期の集石炉、土器（押型文土器・繊維土器群など）、石器（石鏃、楔形石器、石飾など）が見つかっている。鶴石遺跡では後期～晩期の土器が少量出土している。

弥生時代

鶴石遺跡では前期の土坑群が見つかっている。遺物は前期の土器・石器を中心に後期までの土器が出土している。周布古墳でも前期の土器、石器が確認されている。

また、周布川の河原で後期の仿製鏡が見つかっている。洪水後の河川敷で見つかっており、他に打製石斧が見つかっている。森ヶ曾根古墳では埴丘下で後期の土坑が確認されている。

後期の土器はツナメ遺跡などで破片が見つかっているが、住居跡などは不明である。

古墳時代

前期古墳は確認されていない。中期古墳は周布古墳が石見を代表する前方後円墳である。国指定史跡のため埴丘自体の調査は行われていないが、隣接地の調査により埴丘は現状より大きい全長74mで周溝が巡っていたことが確認された。周溝からは多量の葺石と埴輪片が出土し、5世紀前半頃に造られたと考えられる。

日脚遺跡では6世紀前葉の須恵器窯跡が見つかっており、石見で最古の須恵器窯跡である。6世紀中葉の須恵器や埴輪も見つかっており、この時期の窯跡が周辺にあると考えられている。

後期古墳では横穴式石室をもつ古墳が多い。めんぐろ古墳は6世紀前半頃に造られた古墳である。詳細は不明であるが、中部九州系に系譜をもつ横穴式石室とされ、島根県で最も古いものである。須恵器（子持壺・蓋杯など）、鉄器（刀・馬具類）、玉類など豊富な遺物が見つかった。出土品は島根県指定文化財に指定されている。また周辺から埴輪片も出土している。

6世紀後半以降の発掘調査された後期古墳は日脚古墳群（1～6号墳）、森ヶ曾根古墳、蔵地宅後古墳がある。

いずれも石室の基礎部や抜取痕しか残っていなかったが、石室の形は無袖式横穴式石室（森ヶ曾根古墳）と片袖式横穴式石室（日脚3号墳）が見られる。他に横穴式石室と考えられる石が見られる古墳は、鶴石古墳群、塙原山古墳群、小西ヶ丘古墳などがある。

古墳時代中期から後期初めまでは、石見を代表する周布古墳、めんぐろ古墳が造られるが、その後は中小規模の古墳が平野に散在するようになる。古墳時代終末から古代にかけては、ほとんど遺跡が確認されておらず様相が不明確である。

古代

日脚遺跡で遺物と建物跡が確認されているが、他には鶴石遺跡や寺本遺跡で遺物が少量出土するのみである。青口遺跡では丹塗りの高台付土器器皿が2点出土している。

中世以降

中世には鶴石遺跡で遺物（貿易陶磁器・滑石製鍋など）、寺本遺跡（土師器・貿易陶磁器）・市屋敷遺跡（土師器・貿易陶磁器）・ツナメ遺跡（土師器・貿易陶磁器）で構造・遺物が確認されている。

この頃は石見を代表する武士団である益田氏から分かれた周布氏に関連する遺跡が多く、伝周布氏の墓（五輪塔・宝篋印塔群）、鳴尾城跡（周布城）などがある。慶長5年（1600）年に周布氏が長門へ転封されるまで周布氏の本郷であったと考えられる。周布氏は応永32年（1425）長浜に漂着した李朝の人々を対馬へ護送したことをきっかけに受図書と認められ朝鮮と約50回程交易したと李朝実録に記されている。しかし、近年の研究では交易はいわゆる名義貸（偽使）であった可能性が指摘されている。

なお、近世には日脚産砂鉄の「ヒナシ」が製鉄の際に溶融を促進する薬粉鉄として各地のたたらに運ばれていたとされている。また、江戸時代末から昭和40年代頃までこの地域でも「石見焼」と呼ばれる陶器と瓦が大量に焼かれていた。窯跡が現在も各地で残存している。

主要参考文献

全般

中尾典史1933『周布村郷土史』

島根県那賀郡周布村尋常高等小学校1937『周布村郷土誌』

浜田市1973『浜田市誌』上巻

浜田市教育委員会 1977『浜田の文化財』

吉田秀樹1991『日本地名辞典』新人物往来社

平凡社1995『日本歴史地名大系第三三巻 島根県の地名』

浜田市教育委員会2002『浜田の文化財』

川原和人1970『浜田高校所蔵土器』『石西の須恵器』

日脚遺跡

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』

鶴石遺跡

前島己基1973『浜田市鶴石遺跡』『季刊文化財』22号 島根県文化財愛護協会

柳原博英1996『鶴石遺跡について』『亀山』第23号 浜田市文化財愛護会

柳原博英1999『島根県鶴石遺跡出土の大陸系磨製石器類について』『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』田中義昭先生退官記念事業会

柳原博英2005『浜田市鶴石遺跡出土遺物－弥生前期土器を中心にして－』『古代文化研究』第13号 島根県古代文化センター

周布川河原出土銅鏡

川原和人1986『周布川河原出土銅鏡』『弥生時代の青銅器とその共伴関係』埋蔵文化財研究会

鳴尾城跡

藤岡大拙他編1980『日本城郭大系』第14巻 鳴取・島根・山口 新人物往来社

寺井毅1991『石見福屋氏の桜尾城・松山城・波佐一本松城跡の城状堅堀跡についての考察』『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

島根県教育委員会1997『116 鳴尾城跡』

『島根県中世城館分布調査報告書』(第1集)

石見の城館跡

浜田市教育委員会2007『浜田市遺跡詳細分布調査－周布地区』

鈴居古墳

肥後敏雄1995『鈴居古墳について』『ひのあし』第27号 ひのあし会

森ヶ曾根古墳

浜田市教育委員会1986『周布小建設予定地内埋蔵文化財（森ヶ曾根古墳）発掘調査報告書』

定森秀夫 1989『日本出土の“高靈タイプ”系陶質土器（1）－日本列島における朝鮮半島系遺物の研究－』『京都文化博物館研究紀要』朱雀』第2集

白井克也2003『日本における高靈地城加耶土器の出土傾向』

『熊本古墳研究創刊号』熊本古墳研究会

1998年10月16日付毎日新聞「浜田の須恵器 朝鮮の工人、島根で製造? 韓国学者が説き否定」

藏地宅後古墳

内田律雄1984「出雲丸山4号墳と搬入須恵器」『ふいーるど・のーと』No.6 本庄考古学研究室

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅閉地予定地内発掘調査報告書』

浜田市教育委員会2008『史跡 周布古墳・藏地宅後古墳・市史跡 金田1号墳』

本報告書に調査結果を収録。

塚原山古墳群

浜田市教育委員会 1977『浜田の文化財』

山陰道路

柳浦俊一1993「島根・鳥取出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会

めんぐろ古墳

山本清1957「濱田市めんぐろ古墳出土遺物について」『島根大学論集(人文科学)』第7号 のち、山本清1971『山陰古墳文化の研究』山本清先生追憶記念論集刊行会に再録

土生田純之1980「突起をもつ横穴式石室の系譜」『考古学雑誌』66-3

島根県教育委員会1985『日脚遺跡 日脚住宅閉地予定地内発掘調査報告書』

川原和人1985『浜田市めんぐろ古墳出土の須恵器について』『島根考古学会誌』第2集 島根考古学会

浜田高校歴史部・大谷晃二 1995『浜田市周布古墳測量調査報告書(上)』『島根考古学会誌』第12集 島根考古学会

角田徳幸1997「島根県の横穴式石室」『芸備 第26集』芸備友の会

角田徳幸2007「山陰における九州系横穴式石室の様相」

『日本考古学協会 2007年度 熊本大会 研究発表資料集』

浜田市教育委員会2008『史跡 周布古墳・藏地宅後古墳・市史跡 金田1号墳』

周布古墳

島根県教育委員会1963『島根の文化財』第三集

島根県教育委員会1985『日脚遺跡 日脚住宅閉地予定地内発掘調査報告書』

内田律雄・曳野律夫・松本岩雄・渡辺直幸1991「島根県『前方後円墳集成』中国四國編」山川出版社

大谷晃二1993「周布古墳の測量調査はじまる」『石見考古学研修会誌』創刊号 石見考古学研修会

浜田高校歴史部・大谷晃二 1995『浜田市周布古墳測量調査報告書(上)』『島根考古学会誌』第12集 島根考古学会

柳原博英2004「周布古墳の墳丘調査(島根県浜田市)」『島根考古学会誌』第20・21集合併号 島根考古学会

本庄考古学研究室2005「石見・隱岐の主要古墳一覧」『島根考古学会誌』第22集 島根考古学会

浜田市教育委員会2008『史跡 周布古墳・藏地宅後古墳・市史跡 金田1号墳』

沃田寺山古墳

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅閉地予定地

内発掘調査報告書』

日脚下油道路

島根県教育委員会 1985『日脚遺跡 日脚住宅閉地予定地内発掘調査報告書』

川原和人1978「石見における古式須恵器」『松江考古』第2集 松江考古学談話会

寺本遺跡・市屋敷遺跡・ツナメ遺跡

浜田市教育委員会2007『浜田市遺跡詳細分布調査一周布地区』

1-1

中世周布氏

山根俊久1978「朝鮮貿易の先駆」『石見の郷土史話』下巻

石見郷土研究懇話会

井上寛司1982「貞応二年石見国惣田数注文の基礎的研究」『山陰史談』18 山陰歴史研究会

浜田高校歴史部1983『歴像 複刊第7号 特集 石見の山城について(その2)』

廣田八徳1987「石見の豪族と山城」

松村 建1984「中世後期の村落と土塁」『山陰史談』23 山陰歴史研究会

閑周一1990「十五世紀における山陰地域と朝鮮の交流―石見周布氏の朝鮮通交を事例として―」『史鏡』第20号 歴史人類学会

和田秀作1993「陶氏のケーダーと石見国人周布氏の動向―『周布家文書』の紹介―」『山口県地方史研究』第70号

閑周一1994「中世山陰地域と朝鮮の交流」『山陰地域における朝鮮交流の歴史的展開』報光社

岸田裕之「人沙汰」補考-長州藩編纂事業と現代修史小考-『山口県史研究』三

益田市立雪舟の躰記念館1998『中世益田氏関係文書特別展~兩隣房のケーダーと益田藤兼』

藤川誠1999「石見周布氏の朝鮮通交と偽使問題」『史学研究』226号 広島史学研究会

井上寛司2001「中世の港町・浜田-港湾都市浜田の成立と日本海海水運に果たした役割-」浜田市教育委員会

閑周一2002「第四章 山陰地域と朝鮮の交流」『中世朝海域史の研究』吉川弘文館

閑周一2005「中世における日本海漂民」『歴史と地理』第582号 山川出版社

藤川誠2003「周布氏の朝鮮通交」再考-中世日朝交流史の実像と石見国-はまだ市民大学講座資料

井上寛司2006『安富家文書の語るもの』浜田市教育委員会

浜田市教育委員会2007『浜田市遺跡詳細分布調査一周布地区』

1-2

近世以降

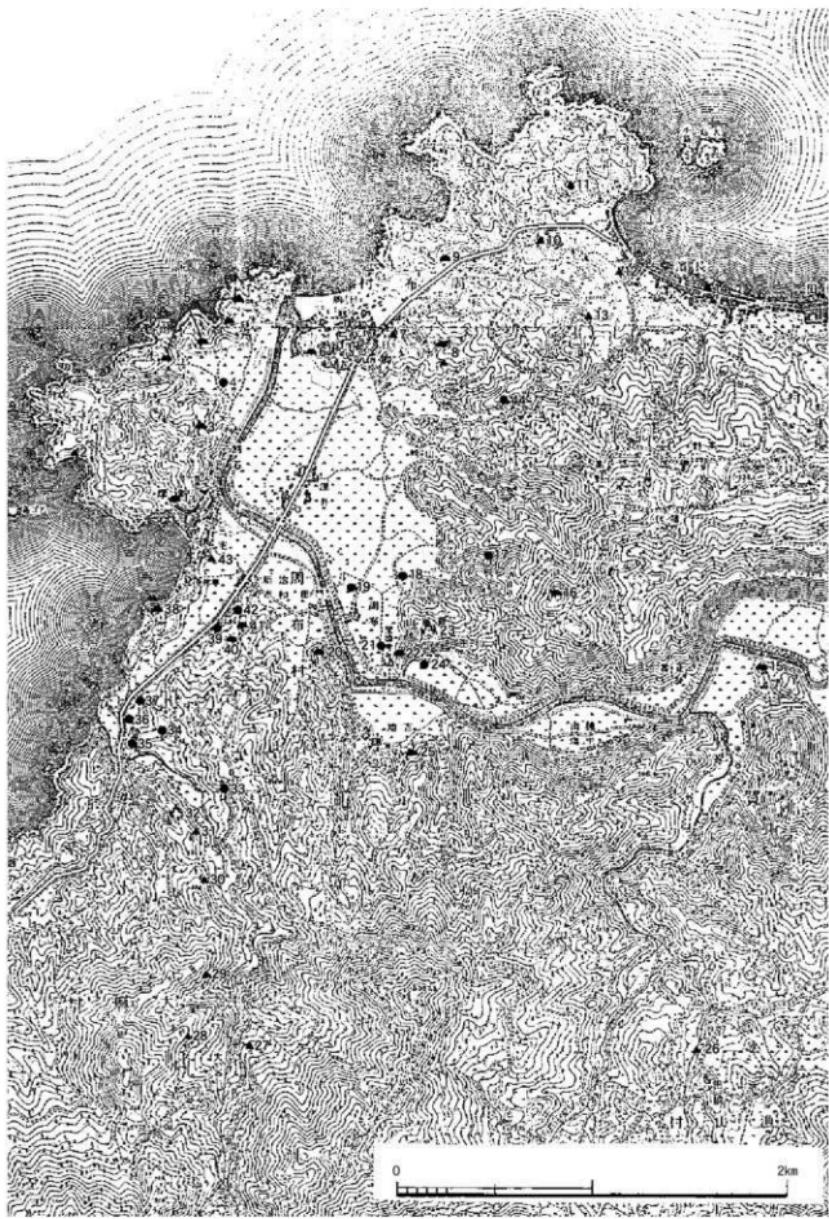
平田正典1979「石見粗陶器史考」石見地方史研究会

浜田市1953『浜田の窯業』浜田市商工水産課

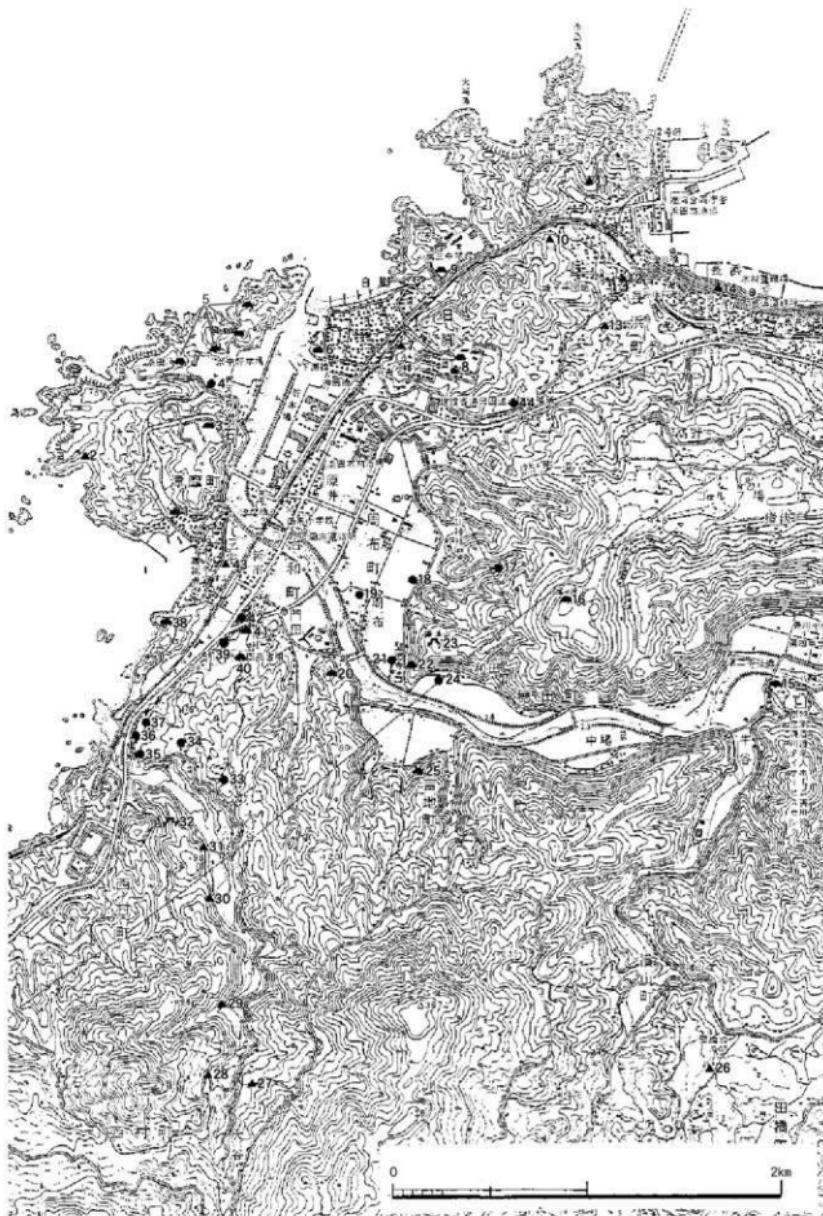
浜田市教育委員会2005『平野窯跡』

浜田市教育委員会2006『室田窯跡』

森山一止2003「史料から見た「ヒナシ」について」『たらら研究』第43号 たらら研究会



第1図 周布地区周辺図(1)・明治34年発行 番号は第1表に対応(1/25,000)



第2図 周布地区周辺図(2)・平成11年発行 番号は第1表に対応(1/25,000)

番号	名 称	種 別	所 在 地	概 要	備 考
1	歳紀地後古墳	古墳	津摩 奥迫	横穴式石室、須恵器、直刀	
2	羽根尾窓跡	石見燒窓跡	津摩	瓦、昭和初期	
3	森ヶ曾根古墳	古墳	治和	横穴式石室、須恵器、弥生土器	消滅
4	鷲石遺跡	土坑群	治和 相田	弥生土器、土師器、須恵器、石器、陶磁器	出土品一部市指定
5	鷲石古墳群	古墳	治和 鷲石	4基 円墳、摩製石斧片	
6	日脚下浦古墳	古墳	日脚	石棺、土師器、須恵器	消滅
7	柿谷窓跡	石見燒窓跡	日脚	明治初年頃は瓦窓、昭和初頭に丸窓	消滅
8	日脚遺跡	古墳・窓跡	日脚	古墳群、須恵器窓跡、縄文早期の土壙群、集石が、奈良時代の掘立柱建物跡	
9	鈴居古墳	古墳	日脚 鈴居		消滅
10	大田窓跡	石見燒窓跡	日脚	瓦窓	
11	はうどう寺窓跡	石見燒窓跡	熱田 長浜	丸物	
12	佐々木窓跡	石見燒窓跡	長浜	すり鉢	
13	渡辺窓跡	石見燒窓跡	長浜	瓦、昭和	
14	永見窓跡	窓跡	熱田 長浜	人形(初期長浜人形)	
15	王子山古墓	古墓	内村	宝鏡印塔 3基	
16	豊原山古墳群	古墳	周布	円墳、横穴式石室	
17	高野山下道跡	散布地	周布	須恵器片	
18	ツナメ遺跡	散布地	周布	弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器	
19	市屋敷道跡	集落	周布	土師器、陶磁器	
20	沃田寺山古墳	古墳	治和 門田	刀劍、須恵器	消滅
21	寺本遺跡	集落	周布	須恵器、土師器、陶磁器	
22	伝周布氏の墓	古墓	周布	宝鏡印塔、五輪塔	
23	秀果城跡	城跡	周布 要害	山城、本丸、空堀、須恵器	周布城跡、市指定
24	川原遺跡	散布地	穂出	下駄	
25	吉地古墓	古墓	吉地	五輪塔、宝鏡印塔	
26	田橋銅冶屋跡	製鉄遺跡	田橋		
27	大谷鋤跡	製鉄遺跡	西村	鉄滓、星号 たらら	
28	大谷鍛冶屋跡No.1	製鉄遺跡	西村	字鍛冶屋	
29	大谷鍛冶屋跡No.2	製鉄遺跡	西村	字鍛冶屋	
30	大谷鍛冶屋跡No.3	製鉄遺跡	西村	字鍛冶屋	
31	大谷鍛冶屋跡No.4	製鉄遺跡	西村	字鍛冶屋	
32	青ノ城跡	城跡	西村 青口	山城	
33	坂辻遺跡	散布地	西村 坂辻	打製石斧	
34	坂辻西遺跡	散布地	西村 大谷下	磨製石斧片	
35	青口遺跡	散布地	西村 大谷下	土師器皿	
36	青口古墓	古墓	西村 大谷下	五輪塔	
37	木引地遺跡・青野鍛冶屋跡・青野鋤跡	散布地・製鉄遺跡	治和 木引地・西村	磨製石斧片、字鍛冶屋、鉄滓	
38	小西ヶ丘古墳	古墳	治和 小西	円墳	
39	三宅辻遺跡	散布地	治和 三宅辻	須恵器片	
40	周布古墳	古墳	治和 三宅	前方後円墳、輪輪、弥生土器	国指定
41	めんぐろ古墳	古墳	治和 三宅	傍製鏡、玉、馬具、大刀、鉾他	出土品県指定
42	治田遺跡	散布地	治和	須恵器片(子持壺)	
43	大田窓跡	石見燒窓跡	日脚	瓦窓	
44	日脚東遺跡	散布地	日脚	須恵器	

第1表 周辺の遺跡

第3章 調査の概要

第1節 古墳の概要

調査地は浜田市津摩町の集落に面した北西側の丘陵先端に位置する。残存丘陵の頂部は標高12.943mである。昭和57年の市道工事により北西から延びる丘陵が分断され、現在は古墳のある丘陵先端部が独立している。それまで祠と石材の周辺まで北西から続く丘陵は畠であったと聞いている。現在は丘陵を取り囲むように宅地が近接しているが、東半分割の家が古くからあるとのことである。現在も南側75m程で海になり、津摩漁港がある。海との関連性を思わせる立地である。

古墳の横には隣接する4世帯で祀る祠が置かれ「もりがみさん」と呼ばれている。以前より知られていた古墳で、石材が露出している。これまで箱式石棺（島根県教育委員会1985）、横穴式石室（浜田高校歴史部・大谷1995）とされてきた。石室の特徴として、板状の石材を腰石に使用し、九州系譜の石室との関連性も指摘されている（浜田高校歴史部・大谷1995）。

これまで須恵器の蓋3（第8図1・2・5）・杯1（4）・短頸壺1（6）が紹介されていた（島根県教育委員会1985）。その後1991年に石室周辺で杯1（3）・台付椀の杯部片（7）が石室周辺から採取された。明治初年に刀剣を出土したとも伝えられている。

調査前の石材は、元位置にあるものは北方向にL字状のやや大きめな板状の石が2列、東方向に石が2段見られ、石棺あるいは北側に聞く横穴式石室と考えられた。周辺の崖は大きく崩落し、北側では石材が崖下まで転落していた。現在残存する旧地形は東西約11m・南北3m程である。昭和48年の島根県埋蔵文化財包蔵地調査カードでは「C状に略図が描かれていた。おそらく、ある時期に崖面が崩壊し北側の側壁が1枚転落したと考えられる。確認調査の結果、東側へ伸びる側壁が新たに検出され、東側に開口する横穴式石室で、床面の半分は既に崩落していることが判明した。出土遺物は須恵器の杯2・提瓶1・台付椀1・小型杯1などが奥壁近くから、羨道部側では現存する石室内ではないが須恵器蓋1・杯5・龜1・高杯2・短頸壺1などが出土した。

周辺は宅地と道路により削平されており、墳丘の手がかりになる地形はほとんど確認できない。祠へあがる道の部分が平坦になっており、祠の古いコンクリート基壇が祠の東側に残っていた。元は下から上がる道沿いにあったものを現状の斜面上に移したと考えられる。祠の北西側には元の丘陵の畠と見られる平坦面が残っている。下の宅地と石室石材との比高差は約6.5mである。

第2節 遺構

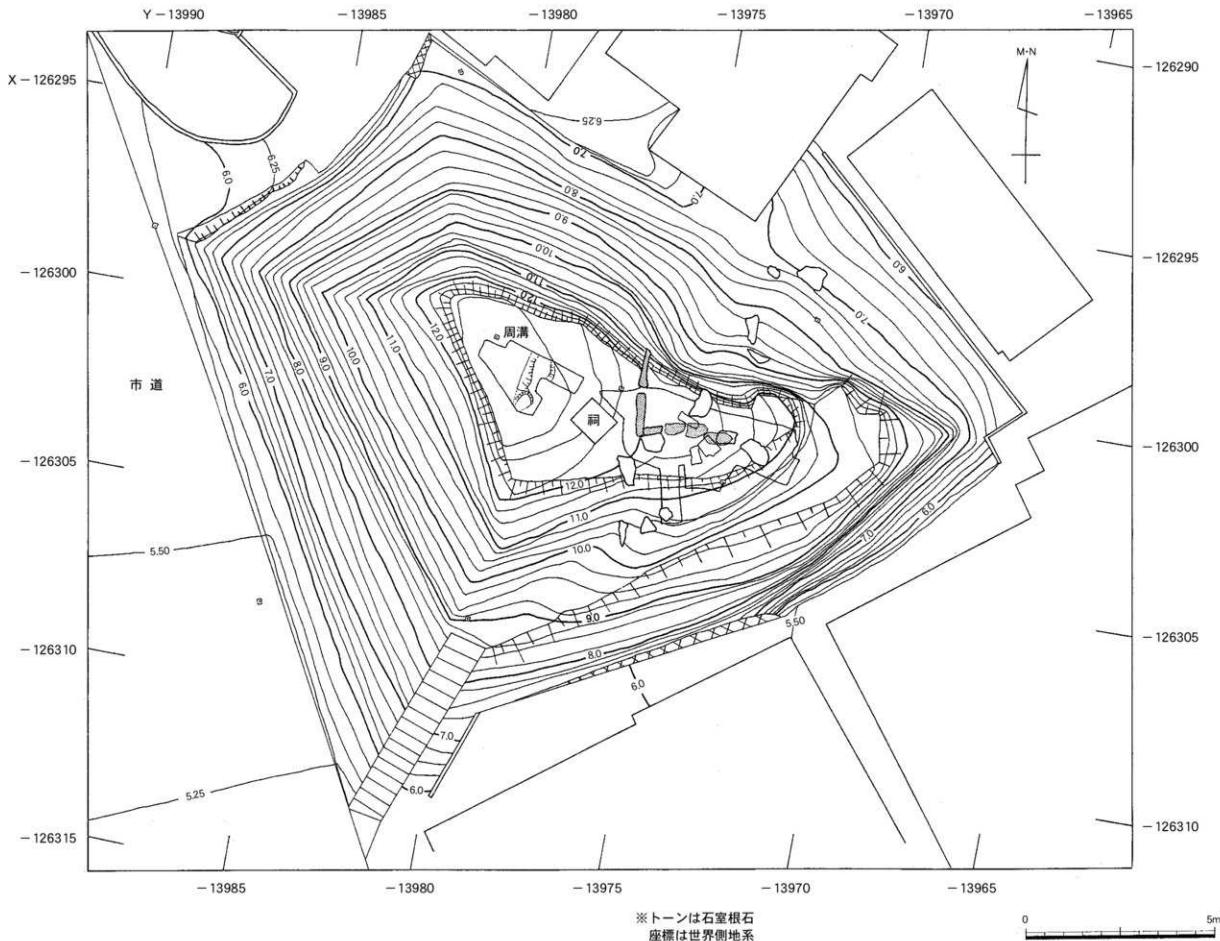
墳丘と周溝

確認調査の結果、石室周辺の地山面は木の根による腐植が激しいが、調査区の東端と西端から急激に落ち込んでおり、ほぼ盛土は流出していると考えられる。

確認調査では、現在の丘陵最高所にあたる石室西側の調査区で中央より西側で黒色土の堆積する溝（幅1m以上・深さ10.5cm）を確認しており、周溝の可能性が考えられた。この溝を安全な範囲で面的に調査した。溝は現地表下約0.6mにあり、底は緩やかに西側に高くなっている。奥壁から約3m離れた位置にあり、やや北東から南西方向に造られており、奥壁とは並行しない。調査区南端には周溝が埋まった後に穴が掘りこまれている。

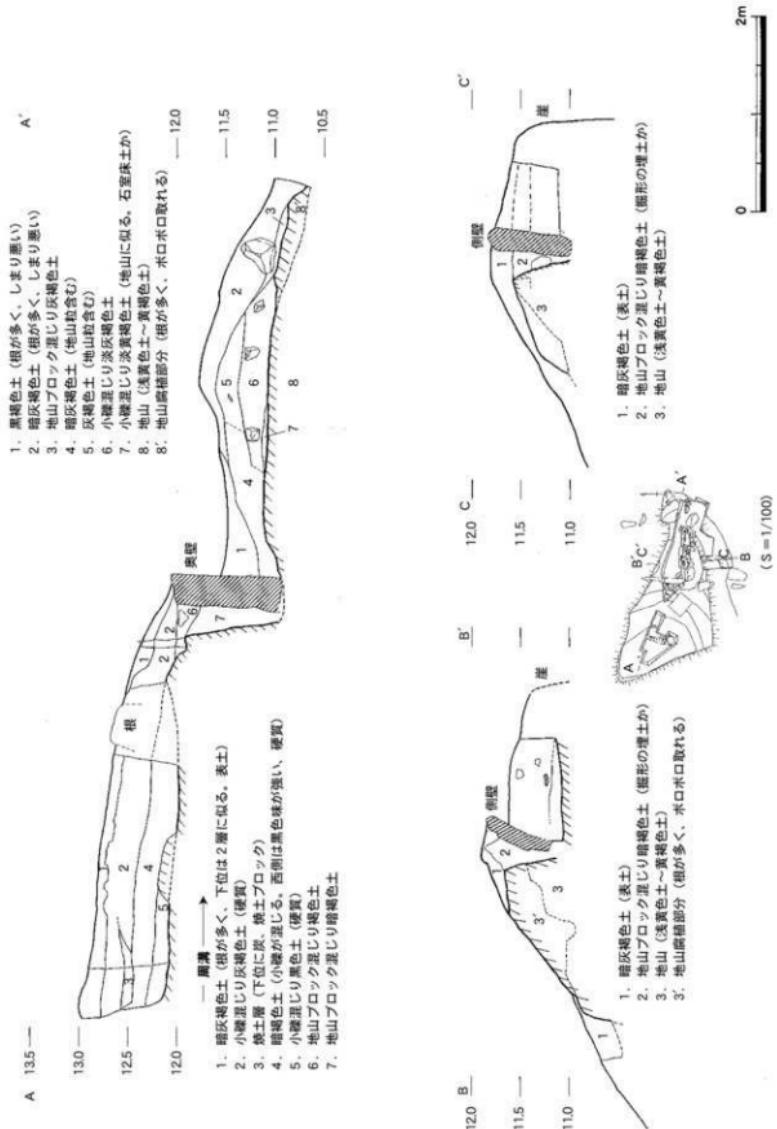


第3図 藏地宅後古墳周辺図 (S=1/2,500)



第4図 蔵地宅後古墳 測量図 (S=1/100)

第5図 調査区土層図



横穴式石室（第6図・第7図）

確認調査の結果、石室の原位置にある石は奥壁の大型石2列と南側側壁の中型石が4列と根石しか残っていないと判明していたため、それ以外の動いた石を取り除き石室の全体を検出した。

石室の特徴は石の短辺を接地させて長辺側を立てていることである。いわゆる「腰高」に石を使った石室で、石を多く重ねるよりも高さをさせぐことを指向している。一方で根石の上にさらに石を積み上げることを見越し、石材の細い側を下に向接地面の多い辺を上にしている。このため特に奥壁の石は断面が逆三角形状に下がる込んでおり、石だけ見ると安定性に欠く据方をしている。

奥壁に接する側壁には、やや位置が動いていると見られるが2段目の石が根石と掘形の上に載っていた。根石の形がやや安定性に欠くことからも想定できるが、残存掘形のレベルから見て根石を据えて掘形を埋めた後、2段目以降の側壁を構築していったと考えられる。側壁は高さ0.7m前後でほぼ高さを揃えており、さらに1段側石を積むことで奥壁の高さ1.1m前後で高さを揃えている。いずれの石の上面も一部加工しながら、ほぼ平らに近い面を向けている。

奥壁と側壁の組み合わせは、奥壁下半をえぐるように加工して、側壁を置いている。このため、平面で真上から見ると奥壁で側壁を挟んでいるように見えるが、下半分では側壁で奥壁を挟むように立てかけている。おそらく、奥壁を先に据えてある程度安定させた後、下半をえぐるように加工調整し、側壁をはめたと考えられる。お互いの石の隙間はありません。

石室の掘形は石材から約30～55cm離れた位置で確認できた。深さは、側壁が石材より低く約60cm、奥壁が石材とほぼ同じ1.1mで側壁側が浅い。側壁側は地山が削られている可能性もある。奥壁裏を中心に掘形との間に15cm前後大の石を入れる場所もあるが、大半は硬質な地山ブロック混じり暗褐色土であった。

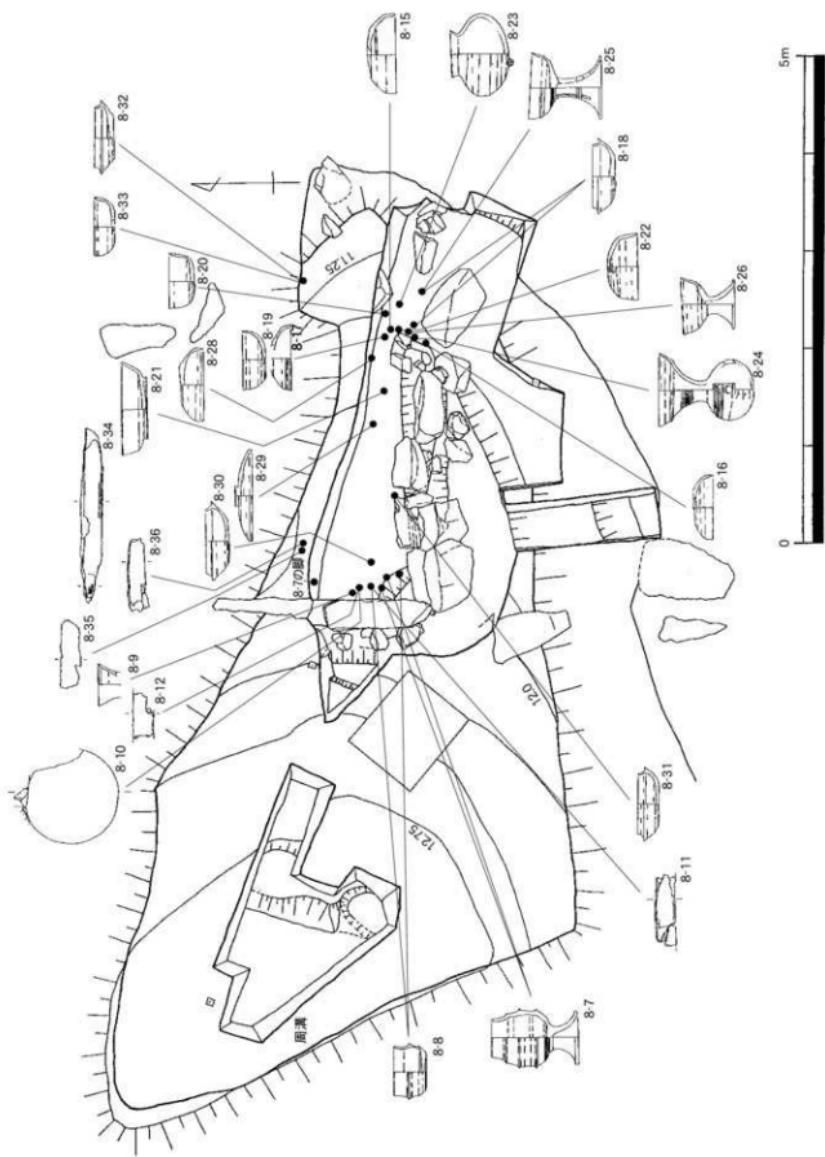
根石掘形は石室内で地山面と石材の間に暗褐色土があり確認できた。奥壁と奥壁側の側壁はほぼ掘形に接しており、義道側に向けて石よりやや大きくなる。側壁側は石室掘形に沿ってほぼ直線で確認できたが、奥壁の掘形は不定形で直線にならない。根石掘形の深さは側壁が5.3～9.5cm、奥壁が2.8～8.1cmと特に奥壁は浅い印象を受ける。奥壁の下場はほぼ掘形下場に接しており、掘形は浅くてもよかったかもしれない。根石掘形から見ると、当初の設計プランは奥壁と側壁とがやや鋭角になる形であろう。

石室の石材は、奥壁が流紋岩質凝灰岩、奥壁側の側石が流紋岩（古墳南東側の専称寺のある丘陵一帯に分布）と、この2種類が多い。その他、少量の安山岩（古墳北西側の津摩公園北側一帯に分布）が見られる。側石の流紋岩質凝灰岩には円形の風化痕が見られるものがあり、もともと露出していた自然石を一部加工して用いている。主に現在の津摩集落のある海側からの石で石室を造っている。丘陵の地山には花崗岩の貢入がみられる。石材の重量は奥壁が400kgと700kg、側壁は100～200kgで周辺には500kgの石もあった。

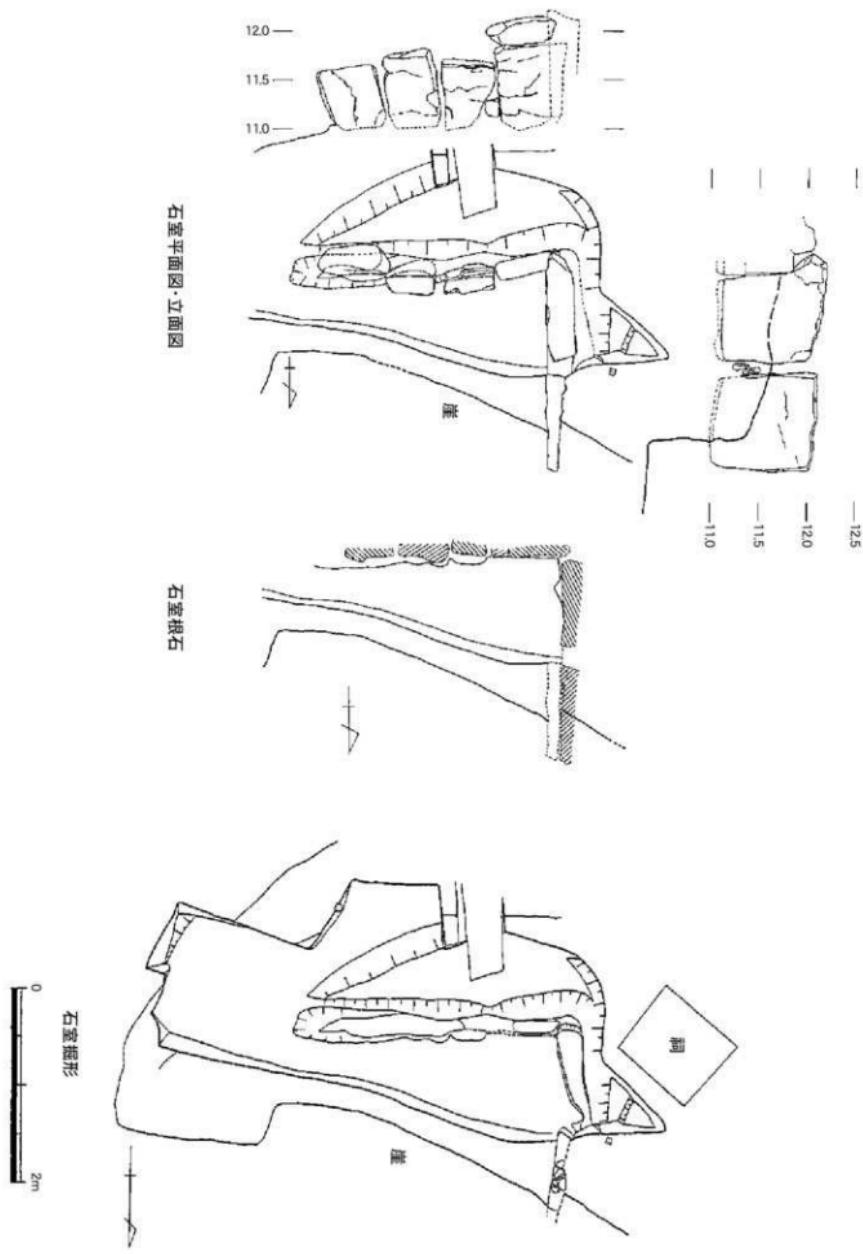
石室内に堆積した土は大半が搅乱土と考えられるが、側壁～奥壁側には地山面の上に地山に似た礫混じりの淡黄褐色土が10～15cm残っており、その土の下で側壁の掘形を検出した。おそらく石室の根石を据えた後に石室内に土を敷いて床面を造ったと考えられる。

調査前と確認調査で既に多くの須恵器が出土していた（第8図・1～27）。石室の全面調査でさらに遺物が出土し、工事直前まで崖面側に残した土手の調査でも崖面で木の根に抱き込まれて下半部が崖面に浮いた状態で須恵器杯（第8図・32）崖面ぎりぎりで鉄刀（34～36）が出土した。

もともと「もりがみさん」の祠があった場所（石室南東側）から寛永通宝（第38図・37）も見つかり、祠が近世には存在した可能性もある。



第6圖 橫穴式石室 遺物出土狀況 ($S = 1/50$)



第7図 横穴式石室 施測図 ($S = 1/50$)

第3節 遺物

出土品は表採品と併せて最終的に須恵器蓋8・杯10・短頭壺2・短頭壺蓋1・壺類口縁1・提瓶1・龜1・高杯2・台付椀1・小型杯1・鉄刀5片・不明鉄製品となった。

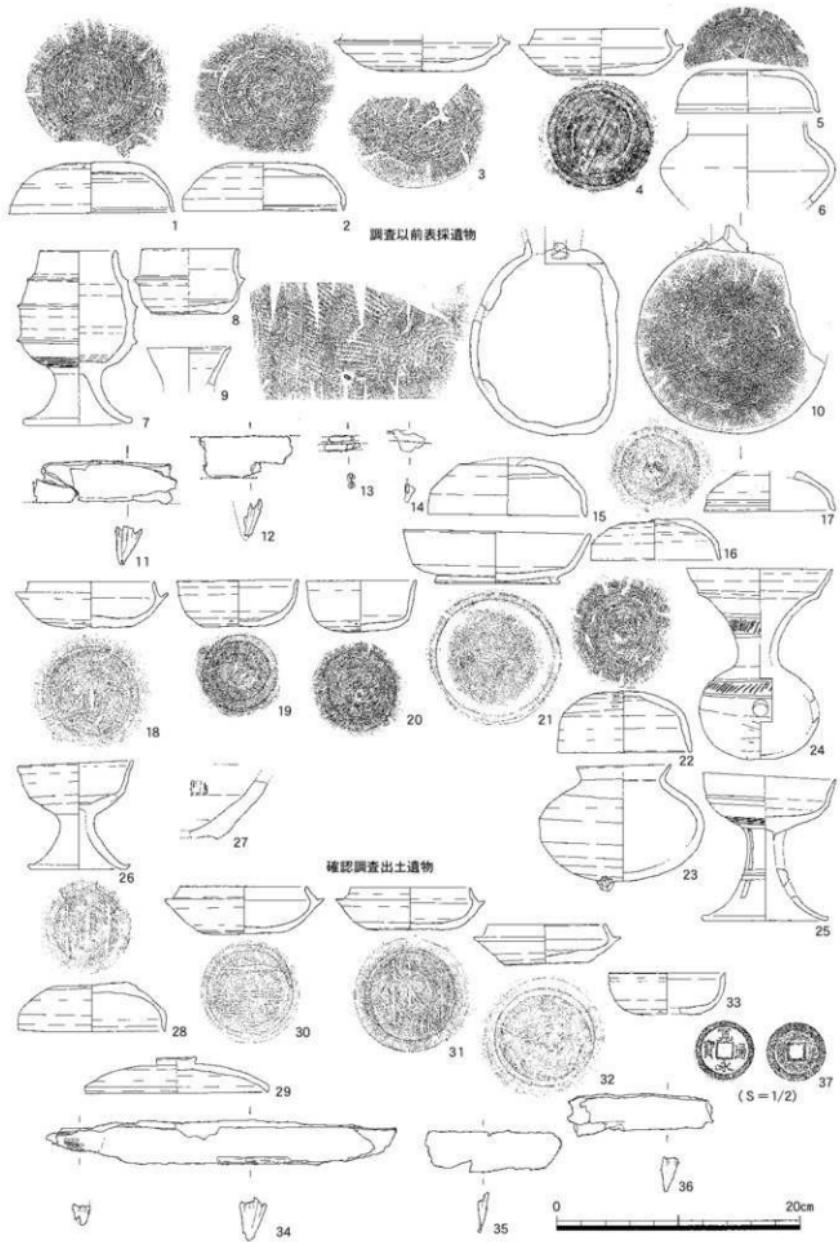
調査以前から石室周辺で須恵器が採取されており、今回の調査の出土品と接合するものもあった。特に須恵器台付椀は1991年に杯部の破片が1点採取され、確認調査で接合する破片が2点出土し、その後脚部が見つかっていいる。

調査以前・確認調査出土遺物（第8図・1～27）

(1～6)は調査以前に石室周辺で採取された須恵器である。T3出土の破片と接合することから、石室の奥壁側の出土と考えられる。(1・2)は蓋で、いずれも天井部は2周以上のやや粗い回転ヘラケズリ、内面は口クロナデが施される。口縁端部内面は(1)は端部からやや上がった位置に沈線状のナデ、(2)は端部近くに沈線状のナデをいれていれば段状に仕上げている。(3・4)は杯で、底部は(3)が3周以上の全面ヘラケズリ、(4)は板状圧痕が残り周辺を2周以上の回転ヘラケズリを施している。これらの蓋杯は暗灰色でやや焼成が悪い。(5)は高杯の蓋の可能性がある。天井部は回転ヘラケズリ、カキメ、浅い板状圧痕、「X」字ヘラ記号を施す。口縁端部はやや外反する。色調は灰色である。(6)は短頭壺で肩部と下半部の破片である。

(7～27)は確認調査での出土である。(7～14)は石室内奥壁側(T3)の出土で、破片になっているものが多い。(7)は台付椀で口径6.1cm・底径8.3cm・器高14.2cmである。胎土は0.5～1mmの大白色粒を少量含む。外面には黒灰色の自然釉がかかり、(8)以外の他の須恵器とは焼成が異なる。杯の端部はやや内傾する。体部に3条のつまみ出し突帯をつくる。突帯は高さ3mmで断面三角形である。杯部と脚部の接合部には外面にカキメが施される。(8)は小型杯で口径7.8cm・底径5.1cm・器高5.3cmである。(7)の台付椀と同様の自然釉・焼成とつくりである。底部はヘラ切りで、外端を3単位ほど小さく削っている。体部の器壁は薄く、断面三角形のつまみだし突帯を1条つくる。蓋の可能性もあるが、底部が未調整に近いこと、体部の器壁が薄いことから、杯と考えられる。(9)は壺類の口縁で(10)の提瓶の口縁の可能性もあるが、接合しない。(10)は提瓶で残存縦幅17cm・横幅15.5cm・器高12.6cmである。まず扁平な下半部を叩き調整でつくっており、内面には当具痕と指跡が残る。体部成型後に口縁部を造って天井部を粘土円盤でふさぎ、全体をカキメ・ナデ調整している。封鎖するための粘土円盤には外側から1箇所貫通しない刺突がある。環状の耳跡が残るが穴の幅が狭く、吊るすなど実用的な環ではないと考えられる。(11・12)は鉄刀で断面三角形の直刀である。(11)は残存長11.7cm・幅4cm・厚さ2.2cm、(12)は残存長7.6cm・幅3.4cm・厚さ1.5cm以上である。同一個体かは断定できなかった。(13・14)は断面方形の鉄棒で、(13)は1辺0.2～0.4cm・長さ3cm以上、(14)は1辺0.2～0.5cm・長さ2.6cm以上である。古墳に伴う遺物かは不明である。

(15～26)は石室内羨道側(T5)の出土である。(15)は須恵器蓋焼成が悪く土師質である。(16)はやや小型の蓋で天井部はヘラ切り未調整である。天井部に一部板状の圧痕が残り、切離し後、一時的に作業台などの上においていた可能性がある。(17)も小型の蓋で口縁端部はやや外反する。(18～21)は杯で、受部が付くもの(18)と口径の小さい楕状で体部が丸みを持ち口縁が外反するもの(19)・直線的なもの(20)、口径が大きく高台のつくもの(21)がある。(20)は短頭壺の蓋の可能性もある。(18)の底部は薄い板状圧痕が残り、周辺にヘラケズリを2～3周施す。(19・20)の底部は単位の明瞭な回転ヘラケズリを3～4周施す。(21)は板状圧痕が残り、外反する高台を貼り付けている。体部は屈折して立ち上がる。(22)は短頭壺の蓋で天井部が丸いこと、(23)の短頭壺の肩部の重焼痕と径が合致することから判断した。他の杯に比べ器壁が厚く、天井部は全面回転ヘラケズリである。(23)は短頭壺で、底部に焼成時の釉着物があるため正立しない。器壁の薄い口縁部を造り、体部外面上半は回転ヘラケズリである。底部内面には板状圧痕が残り、内面はナデで調整される。(24)は龜で復元口



第8図 出土遺物 ($S = 1/4$)

径11.9cm、体部径9.8cm、器高15.5cm、頸部高7.9cmで頸部と体部はほぼ同じ高さである。頸部と体部には、沈線2本の間に板状工具による列点文が施される。体部下半はヘラケズリのちナデを施す。(25・26)は高杯で、器高が高く脚部に3方向2段の透かし穴をいれるもの(25)と無文で小型のもの(26)がある。(25)は杯と脚の接合部外面にカキメを施す。(26)の小型高杯は杯部の接合があまく、外面に接合痕が残る。(27)は表採された備前系陶器の摺鉢で、内面は8本以上の摺り目が残り、摩滅している。底部は凹凸があり未調整である。

本調査出土遺物（第8図・28～37）

(37)の寛永通宝以外はすべて石室内の出土である。

(28・29)は須恵器蓋である。(28)は天井部に板状圧痕が残り、周辺に回転ヘラケズリを1周施している。(29)は扁平な宝珠つまみのつく蓋で、口縁端部が下方へ屈曲する。内面に重焼痕があり、杯の上に置いて焼成した可能性がある。(30～33)は杯で、受部が付くもの(30～32)と口径の小さい椀状で体部が丸みを持ち口縁が外反するもの(33)がある。(30・31)は底部に板状圧痕が残り、周辺に回転ヘラケズリを2～3周施している。(32)は杯の形状は(30・31)に似るが、底部は未調整でヘラによる切離し痕が残る。このため底部が他に比べ一段と扁平で接地面が広い。(33)の底部は単位の明瞭な回転ヘラケズリを3周以上施し、口縁端部はやや外反する。

(34～36)は鉄刀で断面三角形状の直刀だが、同一個体かは断定できなかった。鍛造が甘いためか、いずれも背面が3層以上に割れており板状の芯金の単位がみえる。(34)は残存長28.7cmで刃部の幅4cm・厚さ2.3cm、茎部の幅1.8cm・厚さ1.4cmである。茎部と刃部には表面に木質が残っている。(35)は残存長11.15cm・幅3.4cm・厚さ0.9cm以上でやや幅が狭いものである。(36)は残存長12cm・幅3.5cm・厚さ1.5cm以上である。(37)はもともと祠があった場所から見つかった寛永通宝である。

第4章 総 括

周布地区の中小規模古墳である蔵地宅後古墳の調査により、部分的であるが石見地域の古墳文化を考えるための基礎資料を提示することができた。確認調査報告（浜田市教育委員会2008）と内容が重複する点もあるが、確認調査と本調査の成果を併せてまとめる。古墳の時期区分は10期区分と編年表（内田他1991・大谷2003・第2表）、須恵器は出雲・石見編年（大谷1994、2001・山陰横穴墓調査検討会1998・島根県立八雲立つ風土記の丘1998・第11図）に基づいている。

第1節 墳丘と横穴式石室について

墳丘はほとんど削平・流出しているため断定できないが、現在残る丘陵部が最大10m程あり、石室奥壁より後（丘陵高所）で黒色土が堆積した周溝（幅1m以上・深さ10.5cm）が確認された。この溝は石室奥壁に平行しないことから、径10m前後の円墳と見られる。

石室の原位置にある石は根石である奥壁の大型石2列と南側側壁の中型石が4列しか残っていないかった。石室の特徴は石の短辺を接地させて長辺側を立てており、いわゆる「腰高」に石を使った石室である。石を多く積み上げるよりも高さをかせぐことを重視しているが、根石の上にさらに石を積み上げるために石材の細い側を下に向け接地面の多い辺を上にしている。特に奥壁の石は顯著で、石室内面は直線的に石材を加工しているが、端側へ向けて特に背面が不整形になり端側の断面は逆三角形状に下がすぼむ。地山面の掘形も不整形で石だけ見ると安定性に欠く据方をしている。

横穴式石室は東に開口し奥壁の幅約2m・長さ2.3m以上（根石掘形は2.7m以上）で、羨道と床面の半分は崩落している。墳丘と石室の大半が壊れており、全体の規模が不明だが、奥壁幅からみてもかなり大型の横穴式石室をもつ古墳であったことがわかる。側壁は4列確認できたが、その先は残った地山面が傾斜しており石の掘形も検出できなかった。このため袖石の有無など玄室形態は不明である。根石掘形から見ると、当初の設計プランは片壁の掘形が残っていないため不明確だが、奥壁と側壁とがやや锐角になる形であろう。

周辺の発掘調査が行われた石見4期の森ヶ曾根古墳（浜田市教育委員会1986）、後出する石見4期の日脚古墳群（島根県教育委員会1985）と石室形態を比較する。各古墳の特徴は以下のとおりである。石室平面形は奥壁幅が前壁よりあきらかに広く羨道側に向けて狭くなるものを「羽子板状」、ほぼ同じもの（やや狭いものも含む）を「コの字状」とする。

古墳名	時期	石室平面形	根石の据方
蔵地宅後古墳	石見4期	不明・コの字状？	石短辺を接地
森ヶ曾根古墳	石見3期	無袖形・羽子板状	石長辺を接地
日脚1号墳	石見4期	不明	石短辺を接地（奥壁のみ残存）
日脚2号墳	石見4期	不明・羽子板状	石長辺を接地（側壁のみ残存）
日脚3号墳	石見4期	片袖形・羽子板状	石短辺を接地
日脚4号墳	石見4期	不明・コの字状	奥壁のみ石短辺を接地

蔵地宅後古墳では袖石が残っていないため全体形が不明だが、最も距離の近い森ヶ曾根古墳とは根石の据え方が異なり、日脚3号墳に類似するとみられる。日脚3号墳は平面形が前壁に対し奥壁が広く、奥壁幅：玄室長は1:1.6～1.7とされている（角田1997）。蔵地宅後古墳は奥壁幅が2mと最も大きく、側壁の根石掘形が長さ2.7m以上である。前述の石室比を参考にすると、玄室長は3.2m前後となり、あと1列側石があり玄室を造っていた可能性

もある。

墳丘の規模も不明確だが、いずれも直径9～10m前後の円墳とされるものが多く、規模に大きな差は見られない。

第2節 遺物について

出土品はこれまで出土したものを併せ、須恵器の蓋8・杯10・短頸壺2・短頸壺蓋1・壺類口縁1・提瓶1・甕1・高杯2・台付椀1・小型杯1・鉄刀5片となった。遺物は大半が擾乱を受けて元位置にはないが、おおまかに奥壁側（石見4期）、側壁先端（石見4期～6B期）、最後は石室中央（石見7期）に分けられる。

石室奥壁側は近年掘り起こされたと見られ、搅乱土から石見4期の蓋杯（第8図・1～4）と台付椀（7）、小型杯（8）などが出土している。石見4期～6B期の遺物は石室羨道側、最終である7期の蓋杯（21・29）は石室やや中央より出土している。

須恵器の蓋杯には、「石見型」と仮称される、平坦な底部に板状圧痕（現状ではハケメやカキメの様に板でなでた搔痕と仮定）を残すものがある。大田市～益田市に分布し石見3期が初現である（内田1984・島根県立八雲立つ風土記の丘1998）。藏地宅後古墳の石見4期の蓋杯には「石見型」（第8図4・18・28・30・31）と通常の回転ヘラケズリのものがある。板状圧痕も部分的に薄く底部に圧痕が残り、周辺にヘラケズリを行うもの（18）や、底部が平坦で明確に1単位の圧痕が残り、周辺にヘラケズリを行うもの（第8図4・28・30・31）がある。後者の杯はたちあがり上端の径が9.6～10.8cmと近い傾向にまとまり、日脚4号墳でも同様のものが見られる。（30）の杯は底部が平坦だが板状圧痕と周辺の回転ヘラケズリを行っていない。器壁はケズリを行っていないため分厚く、明らかに底部が平坦に切り離されている。これらの杯はもともとロクロの接地面が多い形に成型し、ヘラを水平方向に差込んで切り離している。

周布平野における石見3期の「石見型」蓋杯は、森ヶ曾根古墳にみられる（第9図・1～5、17～21・浜田市教育委員会1986）。（1～5）は蓋で口径は12.2～15.0cmである。いずれも口唇部から端部内面に沈線をいれて段をつける。（1）は肩部に段がつき、天井部は板らしき圧痕もあるが、回転ヘラケズリである。（2）の天井部は回転ヘラケズリの後に「×」記号が描かれる。（3・4）は板状圧痕の後に周辺に3～4周、（5）は1周ヘラケズリを行っている。（7・8）は口径の小さいもので（7）は天井部が手持ちヘラケズリ、（8）は切離し後にナデ調整を行い、ケズリは見られない。（15～23）は杯で（15・16）の底部は回転ヘラケズリである。（17）は板状圧痕を削って回転ケズリが中心まで行われている。（18・20・21）は板状圧痕の周辺に2～3周ヘラケズリを行っている。（19）の底部は交差する2方向の板状圧痕の後に周辺に2周ヘラケズリを行っている。（22）はやや小型で3周程の中心に届かないヘラケズリがある。（23）はさらに小型で切離し後にナデを行い、ケズリは見られない。（22）は石見4期～5期、（7・8・23）は石見5期、（9～14、24～29）は詳述しないが石見6B・7期の蓋杯である。

須恵器蓋杯の天井部調整は、石見地域ではおおまかに「単位の明瞭な回転ヘラケズリ→回転ヘラケズリ→板状圧痕と周辺ヘラケズリ・周辺ヘラケズリとナデ→ケズリ省略」と変遷すると見られる。出雲地城で蓋の天井部周辺を2～3周削り、中心部にナデを施すもの（A5型）は出雲4期の指標になっている（大谷1994）。「石見型」は石見3期より出現し、法量が縮小し底面積が小さくなることもあるが、周布平野では画一化（底部が特に扁平で板目が一単位でしっかり残る）して見えるのは4期である。圧痕は一部5期まで残る。出雲地城よりやや早く技法の簡略化が進んだ可能性もあるが、一方で従来の回転ヘラケズリを行うものも5期まで残る。

「石見型」須恵器の窯跡としては益田市芝窯跡（石見4期）がある（内田1984・島根県立八雲立つ風土記の丘1998・田中1982）。ほぼ同時期の窯跡として奈古田窯跡（浜田市教育委員会2006）があるが、確認されている杯

片は「石見型」ではない。こうした成型段階からの特徴的な技法の系譜は、分布状況の量的な把握と技法の細分が必要であろう。

他の須恵器を森ヶ曾根古墳出土品と比べると、龜(24)は頸部が短く全体の器高が低くなり、文様も簡素化する。高杯(25)も器高が低く、杯部が丸みをもつ。なお、この高杯(25)はカキメの有無の差はあるが、日脚4号墳出土品に類似する。短頸壺は(6・23)はいずれも肩から胴部にかけて丸みをもつ。しかし、森ヶ曾根古墳ではソロバン玉状になるものと丸みをもつもの両方が出土しており、時期差ではない可能性もある。これらも石見4期と考えられる。

台付椀(7)と小型杯(8)は表面に自然釉が厚くつく良好な焼成で他の須恵器とは異なる。これまでの台付椀の研究(藤川1993)でも同一例はない。体部の突帯も後期古墳や横穴墓から出土する台付椀と比べても高く、全体的に細身である。一見、陶質土器を思わせる(註1)が、国内の他地域からの搬入品の可能性もある。出土位置から初葬(石見4期)時に石室に入れられたのであろう。

なお、出雲から見た石見の須恵器の地域差として、主に口縁端部を鑿刃状に仕上げる点やカキメや装飾の多用などがこれまでに挙げられている(内田1984、田中1982、前島1974、松本・柳浦1991、山本1960)。これらの特徴は周布地区の後期古墳でも見られるが、すべてが主体的な特徴ではないようと思える。現在、古墳時代後期の須恵器資料は益田市が多く、前述の特徴が強く見える。この特徴が石見の各小地域にどのように見られるか整理する必要がある。

第3節 蔵地宅後古墳と周布平野の後期古墳について

蔵地宅後古墳の周辺には日脚古墳群・森ヶ曾根古墳などの横穴式石室をもつ古墳がある。時期の古いめんぐろ古墳を除くと、蔵地宅後古墳は周布地区では最大の横穴式石室をもつ古墳である。

遺物からおよそ6世紀末～8世紀初頭(石見4期～7期)のもので、築造時期は周辺の森ヶ曾根古墳(3期～7期)より後出で、日脚古墳群(4期～7期)とほぼ同時期である。特に、森ヶ曾根古墳は同じ周布川左岸に位置しており、直線距離で500mほどである。森ヶ曾根古墳は東側の周布川河口の丘陵上にあるのに対し、蔵地宅後古墳は西側の日本海に面した丘陵先端にある。現在は津摩漁港があるように、眼下に小湾があり海との関係を思わせる。森ヶ曾根古墳からは伽耶の高麗地城の土器に酷似する小型器台(第9図・30)も出土している(定森1989・田中2002・註2)。蔵地宅後古墳の台付椀と小型杯も搬入品の可能性が考えられる(前掲註1)。両古墳とも突出した規模ではなく、日本海に近い2古墳の被葬者の関係と交易範囲を検討する必要がある。

周布地区では古墳時代中期から後期初めに周布古墳・めんぐろ古墳と石見を代表する大形前方後円墳・豊富な副葬品をもつ古墳が造られ、その後は中小規模の古墳しか確認されていない。こうした状況を他地域と比較しながら古墳時代の周布平野の状況を考えていく必要がある。

註

- (1) 1999年に小田富士雄先生が実見された際のコメントを、東森晋氏よりご教示いただいた。この時は体部破片のみの状態である。新羅の土器に近い印象を受けるが、全体的な焼成の具合から国産の須恵器だという評価である。
- (2) 1988年10月16日付毎日新聞「浜田の須恵器・朝鮮の工人、島根で製造? 韓国学者が渡米説否定」では金元龍ソウル大学名誉教授の実物確認により、森ヶ曾根古墳の小型器台は新羅時代の土器に似るが、周囲のカーブや透かし穴の位置が違い、朝鮮半島で作ったものではないとされている。しかし、一方で古墳出土の他の須恵器と焼成が違うとの指摘(定森1989)もある。現段階では半島産か国産かは断定できず、他地域からの搬入品とする。
- また、この小型筒形器台は古墳初葬時のTK10型式期以外は高靈地城加耶土器の存続年代に重ならず、須恵器TK10型式に相当するものであり、高靈III期前後であろうとされている(白井2003)。また、上っても6世紀中葉のもの(定森1989)ともされている。陶邑と石見の須恵器の併行関係は出雲編年を介しており対比しにくいか、小型器台の製作時期は概ね古墳初葬(石見3期・TK43)か、それ以前(TK10)と見られる。

参考文献

- 内田律雄・曳野律夫・松本岩雄・渡辺貞幸1991「第5章 石見」『前方後円墳集成 中国・四國編』山川出版社
- 内田律雄1984「出雲刈山4号墳と搬入須恵器」「ふいーるど・の一と」No.6 本庄考古学研究室
- 大阪府立近つ飛鳥博物館2006「年代のものさし・陶邑の須恵器」
- 大谷晃二1992「石見地域の古墳文化~地域の古墳の教材化をめざして~」浜田高等学校研究紀要17
- 大谷晃二1994「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会
- 大谷晃二1995「石見」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
- 大谷晃二2001「1 上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」「上石堂平古墳」平田市教育委員会
- 大谷晃二2003「第4篇 宮山古墳群をめぐる諸問題」『島根県古代文化センター調査研究報告書16 宮山古墳群の研究』島根県教育委員会
- 川西宏幸1978「円筒埴輪論述」『考古学雑誌』64-2 のち
川西宏幸1988「古墳時代政治史序説」塙書房に収録
- 川西宏幸1992「河内への道一序にかえて」『古代文化』44-9 古代学協会
- 角田徳幸1997「島根県の横穴式石室」「芸術 第26集」芸術友の会
- 定森秀夫1989「日本出土の“高靈タイプ”系陶質土器(1) -日本列島における朝鮮半島系遺物の研究-」『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第2集
- 山陰横穴墓調査検討会1998「石見・隠岐の横穴墓の年代を考える」
- 島根県立八雲立つ風土記の丘1998「八雲立つ風土記の丘」No.147・148・149合併号
- 島根県教育委員会1985「日脚遺跡」
- 島根県教育委員会1992「大溢遺跡」「石見空港建設予定内地道跡埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 島根県教育委員会1995「久本奥窓跡」「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 白井克也2003「日本における高靈地城加耶土器の出土傾向」

『熊本古墳研究創刊号』熊本古墳研究会

<http://www.ops.dti.ne.jp/~shr/wrk/2003d.html>

田中史生2002「渡来人と王權・地域」『日本の時代史2 総国と東アジア』吉川弘文館

田中義昭1982「益田市西平原窯址群の意義について」「ふいーるど・の一と」No.3 本庄考古学研究室

田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店

浜田高校歴史部・大谷晃二1995「浜田市周布古墳測量調査報告(上)」「島根考古学会誌」第12集 島根考古学会

浜田市教育委員会1986「周布小建設予定地内埋蔵文化財(森ヶ曾根古墳)」発掘調査報告書

浜田市教育委員会2006「史跡 石見国分寺跡・県史跡 石見国分尼寺跡」

浜田市教育委員会2008「史跡 周布古墳・藏地宅後古墳・市史跡 金田1号墳」

藤川智之1993「古墳時代須恵器・台付椀の検討」「徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱」第2号 徳島県埋蔵文化財センター

森永照隆1997「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集 島根考古学会

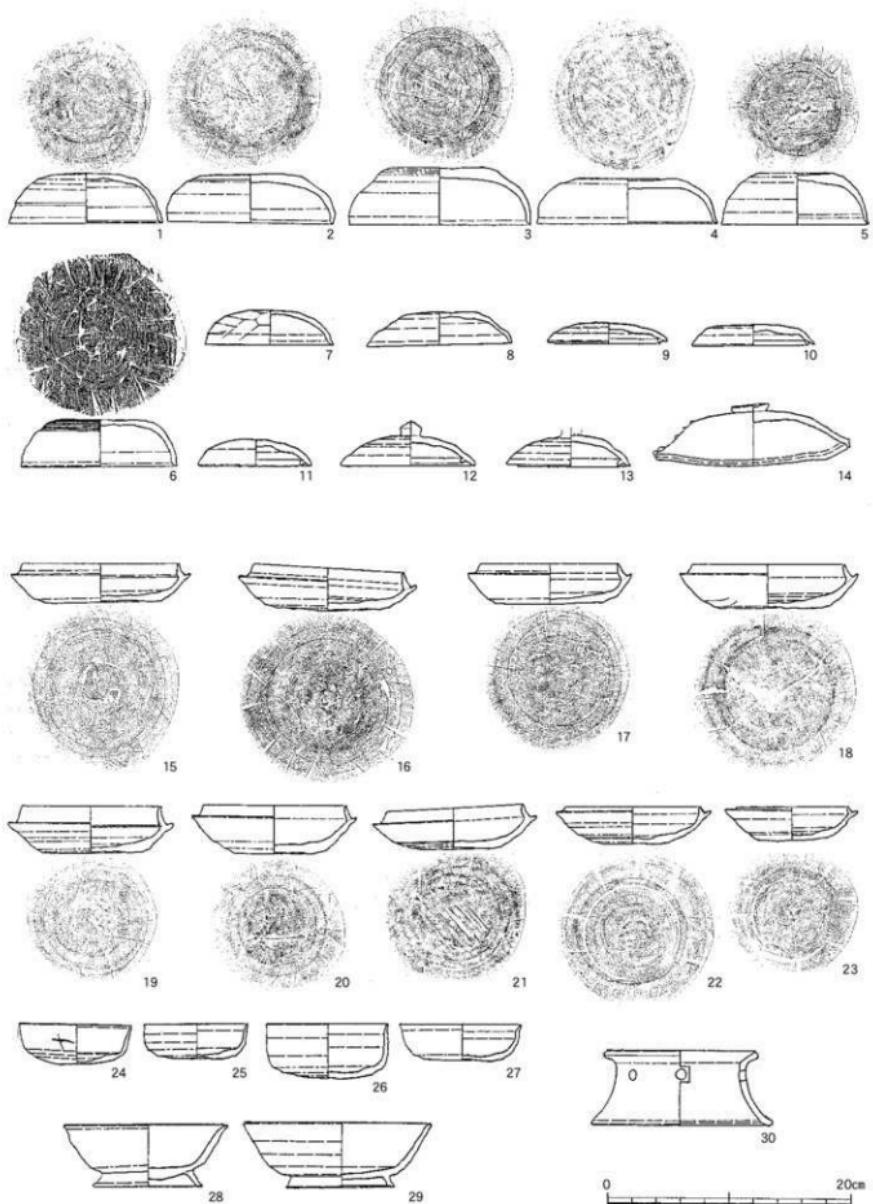
前島己基1974「Ⅶ. 益田・北長追横穴墓群」「島根県埋蔵文化財調査報告書」第V集 島根県教育委員会

増野晋次2001「益田・鶴ノ鼻古墳群について」『松江考古』第9号 松江考古学講話会

松本岩雄・柳浦俊一1991「3 山陰」「古墳時代の研究 6 土師器と須恵器」雄山閣

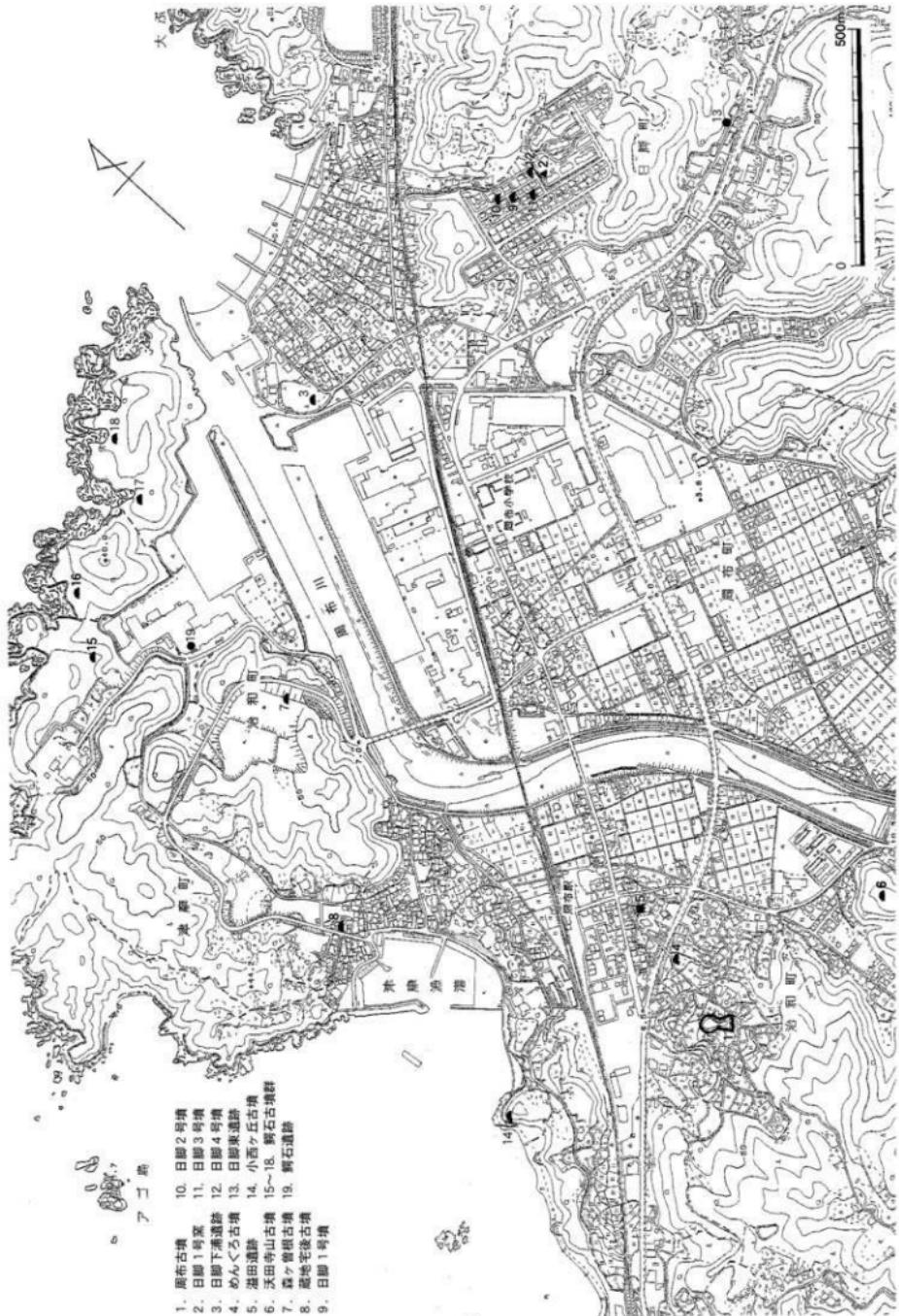
山本清1960「山陰の須恵器」「島根大学開學10周年記念論集」のち、山本清1971「山陰古墳文化の研究」山本清先生退官記念論集刊行会・山本清1991「出雲の古代文化」六興出版に収録

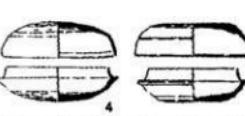
1988年10月16日付毎日新聞「浜田の須恵器・朝鮮の工人、島根で製造? 韓国学者が渡米説否定」

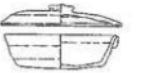


第9図 森ヶ曾根古墳出土須恵器蓋杯・小型器台
※ 報告書掲載図に拓本を加えた

第10図 周布地区の古墳時代遺跡 (S = 1/10,000)



須恵器 蓋坏の変化		石見の主な古墳	
1		須恵器生産の開始 日脚古窯跡群(浜田市)	旭町山ノ内古墳群(石棺) 
2 550年	 2 3	横穴式石室の受容 めんぐろ古墳(浜田市) やつおもて16号墳(旭町)	山ノ内古墳群(横穴式石室) 
3	 4 5	石見副須恵器の出現 下川原横穴墓(石見町) 北長辻1号横穴墓(2次調査・益田市) 明神古墳(仁摩町)	益田市北長辻横穴墓群 
4 600年	 6 7	湯谷惠谷2号横穴墓(石見町) 芝古窯跡群(益田市)	益田市鶴ノ鼻古墳群 
5	 8 9	長尾原B-1号墳(瑞穂町) 野伏原古墳(羽須美村) 堀上古墳(大和村) 江迫1号横穴墓(瑞穂町) 畠ノ森E-4号墳(益田市)	
6 650年	A  10	北長辻8号横穴墓(2次調査・益田市) 畠ノ森B-1号墳(益田市)	
B  11			
C  12	1~6期は 島根県立八雲立つ風土記の丘 1998より転載		

7		久本奥窯跡IV期 蔵地宅後古墳 森ヶ曾根古墳
8		久本奥窯跡V期 石見空港予定地内遺跡I期

第11図 石見の須恵器

第2表 古墳編年表

			編年基準			須恵器			周布平野			金城北部						
10期 編年	埴輪	鏡内 出雲	陶邑	出雲	石見	久本裏 日脚	大溢	益田	周布川左岸・ 西北西地域	周布川右岸・ 北東地域	周布川右岸・ 西北西地域	益田老後 森ヶ曾根	日脚1	日脚3	日脚4	金田川 左岸	金田川 右岸	下総川 右岸
5	Ⅲ	2期	TK73						●74									
6	IV	3期占	TK216~ TK208															
7	V古	TK208	TK23	1期	1	1A・B		1										
8	V1末期	TK47	MT15	2期	2	II		2	○20?	?	○10							
500	V2始期	TK10	TK43	3期	3	III		3	?	○10?	?	○10	?	○10	○9	O10		?
550	9	V2終期	TK209	4期	4	I	IV		?	○10?	?	○10	?	○10	○9	O10		?
10	V3始期	TK43	TK43	5期	5	5・6a期	5・6A	II	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
600	雄	飛鳥I	飛鳥II	6b・c期	6B	III	V	IV	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
650	終 輪	飛鳥II	飛鳥III	6d期	6C	VI	IV	V	4・5	?	?	?	?	?	?	?	?	?
650	終 輪	飛鳥IV	飛鳥V	7期	7	IV	VII	VI	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
650	終 輪	飛鳥V・ 平城I	飛鳥V・ 平城I	8期 (後切り)	8	V	I	VI	6	?	?	?	?	?	?	?	?	?

出雲地域の編年基準は島根県教育委員会2003『島根県古代文化センター調査研究報告書16 宮山古墳群の研究』、島根県教育委員会2004『島根県古代文化センター調査研究報告書23 松江市東部における古墳の調査』を基に作成。凡例 ○円墳 ●前後円墳 ■前方後方墳 ？は墳形不明 数字は墳丘規模
須恵器編年は田辺1981、大谷1994・2001、大阪府立近づ飛鳥博物館2006、埴輪編年は川西1978・1992・V期以降は大谷2003、出雲埴輪編年は藤永1997
石見地域の須恵器編年は、山陰六窓墓調査検討会1998・島根県立八雲立つ風土記の丘1998・島根県教育委員会1985・1992・1995・増野2001を基に作成
ただし、7期以降は出雲地域に併せて新たに追加した。



蔵地宅後古墳（北より）



蔵地宅後古墳（西より）



石室調査前



崖面の状況（右上が奥壁）



周溝全景



周溝土層



石室全景（羨道側より）



石室全景（奥壁側より）



石室全景（南より）



調査区全景（西より）



石室掘形（側壁）



石室掘形（奥壁側）



石室内遺物出土状況



台付椀脚部出土状況



石室内



石室内土層（奥壁側）



石室内土層（中央）



石室内土層（羨道部側）



石室内根石掘形検出状況



側壁除去後



側壁根石掘形



奥壁（側壁側より）



石材搬出状況



奥壁除去後



羨道部崖面須恵器出土状況



崖側土手鉄刀出土状況



石室掘形



奥壁掘形



作業状況



現地説明会



確認調査遺物出土状況 1 (奥壁側上)



確認調査遺物出土状況 2 (奥壁側下)

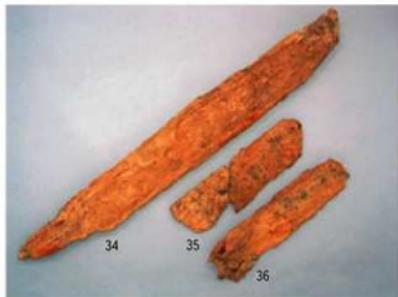


確認調査遺物出土状況 3 (羨道側)



確認調査遺物出土状況 4 (羨道側)





報告書抄録

ふりがな	くらちたくうしろこふん							
書名	蔵地宅後古墳							
副書名	津摩地区自然災害防止工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳原 博英							
編集機関	島根県浜田市教育委員会							
所在地	〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 TEL 0855-22-2612 (代)							
発行年月日	2008年 3月							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くらちたくうしろこふん 蔵地宅後古墳	島根県浜田市 津摩町	32202	L52	34° 51' 06"	132° 01' 13"	2006.11.06 ～2006.12.19	16.93m ²	災害防止工事に 伴う本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
蔵地宅後古墳	古墳	古墳時代(後期)	円墳?・横穴式 石室・周溝	須恵器・鉄刀			須恵器には特殊 な台付椀と杯が ある。	
要約	蔵地宅後古墳は日本海に面した丘陵上にある古墳で、周囲が崩落し石材が露出していた。調査の結果、横穴式石室が半分残存していることを確認し、石室内から須恵器・直刀が多く出土した。石室は奥壁幅2m・長さ2.7m以上で、周布地区最大の横穴式石室である。須恵器には、あまり類例のない台付椀と小型杯がみられる。							

蔵地宅後古墳

津摩地区自然災害防止工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 島根県浜田市教育委員会 2008年3月

島根県浜田市殿町1番地

印刷 柏村印刷株式会社